

RESEARCH @TOKAI +

東海大学の研究トレンド情報誌

Vol. 3 2018.9

Worldwide Curiosity

東海大学の史学・考古学研究

INDEX

01

『ドイツ史の始まりー中世ローマ帝国とドイツ人のエトノス生成ー』で文学部・三佐川亮宏教授が第108回日本学士院賞を受賞

02

東海大学の史学・考古学研究

03

イベント報告

04

プレスリリース

『ドイツ史の始まりー中世ローマ帝国とドイツ人のエトノス生成ー』で文学部・三佐川亮宏教授が第108回日本学士院賞を受賞

文学部歴史学科西洋史専攻の三佐川亮宏教授が、2018年度の第108回日本学士院賞を受賞した。日本学士院賞は、1911年（明治44）年に創設され、学術上特に優れた論文、著書、その他の研究業績に対して贈られる賞であり、日本の学術賞としては最も権威ある賞とされている。三佐川教授の専門はドイツ中世史で、今回の受賞は著書『ドイツ史の始まりー中世ローマ帝国とドイツ人のエトノス生成ー』（2013年、創文社刊）に対して授与されたものである。授賞式は本年6月に東京・上野の日本学士院にて、天皇皇后両陛下の行幸啓を仰いで挙行政され、塩野宏学院長から賞状と賞牌が授与された。なお、三佐川教授は同書について、「松前重義学術賞」を2016年度に受賞している。

● ● ● ● ●

ドイツの歴史を1000年にわたり遡ると、分裂・分断と統一が複数回繰り返されたことに気がつく。10世紀初頭に当時の東フランク王国がフランク＝ザクセン王国に移行し、962年以降にイタリア王国と共に「中世ローマ帝国」を構成したその時代から、アルプス以北のゲルマン系の諸民族は、イタリア人との接触を通じて、協調と反発の中で「ドイツ人」としての民族（エトノス）意識を醸成させてきた。ローマ皇帝は教皇から戴冠を受けて教会の庇護者となるが、11～12世紀の叙任権闘争により教会と対決することになる。以降、皇帝と教皇という2つの権力と権威の並存と各々の衰退、16世紀にはルターによる宗教改革を支持する諸侯・農民らと教会派の諸侯の対立もあり、かつてローマを基準としていたドイツ人の共属意識は、複雑に捻れてしまうこととなった。

三佐川教授は著書の中で、民族、国家のいずれも完全な拠り所とはなり得なかった中世ドイツ人の複雑な自己認識を、歴史学のみにとどまらず、

中世ドイツ語やドイツ文学、西洋法制史、民俗学、人類学などの領域にも踏み込んで包括的に考察した。その網羅性と堅固な論理展開は、権威ある学会誌等で高い評価を受けている。三佐川教授は受賞をうけて、「中世ドイツ史の地道な研究成果を評価していただき大変光栄です。今後は一般の方向けの著作などを通して、中世ドイツの歴史を紹介する活動にも力を入れていきたい」と話している。

略歴

三佐川 亮宏（Akihiro Misagawa）

北海道大学文学部史学科西洋史専攻卒業、同大学院文学研究科西洋史学専攻博士課程中退。ドイツ学術交流会（DAAD）の給費留学生として西ドイツ（当時）・ボン大学へ留学中にベルリンの壁崩壊を経験したことが、ドイツ人のエトノス生成をテーマとする契機の一つとなった。

北海道大学助手を経て、1994年に東海大学文学部講師に着任。准教授を経て2009年より教授。2011年には本著の原形となる博士論文『ドイツ史の始まりー中世ローマ帝国とドイツ人のエトノス生成ー』により北海道大学大学院文学研究科において博士号（文学）を取得した。

対象：メキシコ

👤 吉田 晃章 (Teruaki Yoshida) 文学部文明学科・講師
松本 建速 (Takehaya Matsumoto)
文学部歴史学科考古学専攻・教授
立石 謙次 (Kenji Tateishi)
文化社会学部アジア学科・准教授

岩絵群と神殿建築から究明する先スペイン期メキシコ西部の社会文化発展

メキシコ西部のミチョアカン大学と共同で、メキシコ最大の湖チャパラル湖の東側に位置する未発掘の遺跡「ロス・アガベス遺跡」の調査を実施している。ドローンを使用した地形調査では、複数のピラミッドや広場、大型の基壇などが確認され、昨年5月と今年2月に実施した発掘調査では祭壇の石列や、祭壇に至る階段が見つかった。またピラミッド東側では多数の土器片も発見された。

専門家から特に注目を集めているのが、遺跡の周辺で発見された、メキシコ国内でも最大規模の岩面彫刻（岩絵）群である。共同調査が開始されてから発見された岩絵の数だけでも2018年2月現在で411点に上る。そのうちの16点は、二重の円や四角に十字を組み合わせた刻点十字文（Pecked Cross）と呼ばれる幾何学的な岩絵で、メキシコ中央部の大規模遺跡テオティワカンでも数点確認されていることから、ロス・アガベスが特異な遺跡であり、テオティワカンとの間に文化的な交流があった可能性が示唆された。刻点十字文の機能については、カレンダー（日時計）や建築用の基準点など複数の仮説があるが、未だ説明はされていない。吉田講師らのグループは岩絵の拓本を採取してデータベースを作成し、これまでの岩絵の解釈を再検討して、西部地域における社会文化発展の解明に努めたいとしている。

発掘調査の現場には、「自らのルーツを知るきっかけになる」として現地住民も多数見学に訪れている。また、研究グループでは、住民の生活用水の溜め池付近に岩絵が分布していることから、遺跡も含めた現地の自然環境の保護と、自然と文化財双方の重要性の普及に力を入れている。



対象：メキシコ

👤 横山 玲子 (Reiko Yokoyama) 文学部・教授
資源・環境の利用からみるマヤ文明の動態
—カンペチェ州南部の先史学研究

👤 吉田 晃章 (Teruaki Yoshida) 文学部・講師
メキシコ西部地域の埋葬文化から探る文明間の交流

対象：地中海島嶼部

👤 河島 思朗 (Shiro Kawashima)
文化社会学部ヨーロッパ・アメリカ学科・准教授
金沢 百枝 (Momoe Kanazawa)
文化社会学部ヨーロッパ・アメリカ学科・教授
伊藤 喜彦 (Yoshihiko Ito)
工学部建築学科・准教授

島嶼をつなぐネットワーク型文明の研究 —古代から中世までの地中海における神話・美術・建築—

古代から中世に掛けての地中海の島嶼地域を対象に、島と島、島と本土との関係から地中海文明を捉え直すことを目指している。文化社会学部と工学部に所属する3名の研究者が、それぞれ地中海の古代文明と神話、中世美術、建築と都市を担当する。

これまでの地中海研究では、国家や王朝に重きが置かれ、主要な政治権力の核を持たない島嶼部は周縁として軽視されることが多かった。しかし実際には、島嶼はそれぞれ独自の文化を育みつつも、複数の国や文明が接触し、対立あるいは融和・混交する節点（ノード）としての役割も果たしてきた可能性が高い。

地中海西部、現在のスペイン・フランス・イタリアに属する複数の島嶼には、類似した特徴を持つ巨石建造物群やフェニキア時代の遺跡が点在する。海洋貿易の拠点となり、カルタゴやローマをはじめ複数の主要国による支配を受けた歴史を共有している。地中海の東部にあたるアドリア海、イオニア海、エーゲ海の各島嶼部は、古代にはギリシアとオリエント、次いで東西のローマ帝国、中世にはカトリックと東方正教会の狭間に位置付けられ、ヨーロッパ・アジア・アフリカの3大陸の文化交流の舞台となった。

これら島嶼の文化・文明を再検討し包括的に理解するためには、従来の考古学や歴史学のみ視点では不十分である。異なる分野の専門家による横断的比較研究で、地中海文明の形成と発展に関する新たな知見が得られると期待されている。



対象：エクアドル

👤 大平 秀一 (Shuichi Odaira) 文学部・教授
エクアドル南部における
インカ国家の拡大をめぐる実証的研究

対象：ペルー

👤 大平 秀一 (Shuichi Odaira) 文学部・教授
アンデス先史文化の継承性に関する実証的研究：
インカ時代～現代



東海大学の史学・考古学研究

東海大学は19学部75学科・専攻・課程を有し、多彩な研究分野をカバーする総合大学である。「明日の歴史を担う強い使命感と豊かな人間性をもった人材の育成を通して、調和の取れた文明社会を建設する」という使命のもと、教育と研究の場において、総合大学としての特性を生かし、文系・理系の領域を融合した幅広い知識と、他文化を理解し、国際性豊かな視野を持つ人材の育成を理念の1つとしている。

そこで今号では、それらの軸となる、東海大学で行なわれている世界各地の史学・考古学研究の一部を紹介する。

対象：アジア・オセアニアの海域

① 小野 林太郎 (Rintaro Ono)
海洋学部・准教授

ウォーラシア海域と環太平洋域における
人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究

東南アジア・オセアニア海域における人類の
海洋適応と海洋資源利用の環境文明史

対象：中国

① 木山 克彦
(Katsuhiko Kiyama)
清水教養教育センター・講師

大興安嶺北部両麓における古代～
中世の境界域に関する考古学的研究

靺鞨・渤海・女真の考古学的研究

対象：エジプト

① 恵多谷 雅弘
(Masahiro Etya)
情報技術センター・主任技師

衛星 SAR を用いた多地域対応型
遺跡探査技術に関する研究

対象：日本、東西ヨーロッパ

(ドイツ・フランス・ロシア・ポーランド・イタリア・ハンガリー)

① 鍋谷 郁太郎 (Ikutaro Nabetani) 文学部・教授

第一次世界大戦と民間人―
「武器を持たない兵士」の出現と戦後社会への影響

対象：日本、東南アジアとメキシコを結ぶ環太平洋地域、 フィリピン、スペイン

① 木村 淳 (Jun Kimura) 海洋学部・講師

サンフランシスコ号海事考古学調査と
ガレオン交易船の造船技術に関する国際研究

対象：ベトナム、タイ、インドネシア

① 内藤 耕 (Tagayasu Naito) 文化社会学部アジア学科・教授

立石 謙次 (Kenji Tateishi) 文化社会学部アジア学科・准教授

中西 雄二 (Yuji Nakanishi) 文学部文明学科・講師

倉沢 愛子 (Aiko Kurasawa) 慶應義塾大学・名誉教授

東南アジアのFDI型都市化と地域社会変容に関する調査研究

日系の工業団地の進出が進んだ東南アジアで、地域の人々の住環境や消費活動、さらには生活構造と、それに伴う価値観の変化を追跡調査している。



東南アジア各国の地域社会は、グローバル化の進行と、外国資本による直接投資 (FDI) の影響を受けて大きく変容しつつある。内藤教授らのグループが2006年から5年間を掛けて実施した調査では、日系の工業団地の進出に伴う雇用や利権の発生によってコミュニティ内の階層格差が拡大したことや、他の地域からの出稼ぎ労働者の流入によりコミュニティ自体が流動化しつつあることが明らかとなった。その一方で、出稼ぎ労働者の呼び込みにそれほど積極的でなかった工業団地では、近隣地域に在住したまま通勤する労働者が増え、農村経済との共生が成り立っているケースもあった。

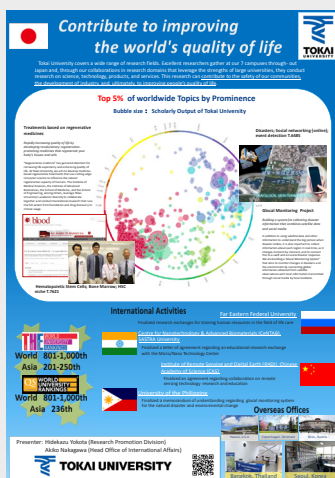
今回の研究は、2006年時の調査をさらに発展させたものである。ベトナムとタイ、インドネシアの3カ国で、日系の工業団地と関わりの強い地域を選び、都市化と消費社会の進展、雇用問題、旧住民と出稼ぎ労働者らの混住状況のその後を比較する。2016年、2017年度には3カ国で各国に進出した日系企業への調査を行ったほか、インドネシアで旧住民やコミュニティ外からの新規流入者に対して、雇用状況や生活状況に関する実態調査を行った。ベトナムとタイについても現地大学などの協力を得て住民調査を設定中であり、最終年度となる今年はインドネシアの調査を継続しつつ、他の2カ国についての調査を行う予定となっている。

イベント報告

エルゼビア主催「Asia Pacific Research Intelligence Conference 2018」に参加

研究推進部・グローバル推進本部は、2018年6月20日（水）・21日（木）に、韓国・ソウルの延世大学で開催されたAsia Pacific Research Intelligence Conference 2018に参加した。本カンファレンスは、世界大手の学術出版社であるエルゼビアが、アジア・太平洋地域における大学・高等教育機関の研究に関する取組みや将来の展望について情報を共有し、今後の大学戦略に活用することを目的として、毎年開催しているものである。5回目となる今回は、「社会的インパクトを与える世界トップ大学」をテーマとして、講演・分科会・ポスターセッションが行われ、13ヶ国・約160名の関係者が参加した。本学はポスターセッションに出展し、エルゼビアが提供する研究力分析サービス（SciVal）を用いた研究の分野別注目度分布、「グローバル・モニタリングプロジェクト」、「コンピュータ科学を活用した創業による再生促進法」や最新の国際活動などについて紹介し、来訪者に対して各項目や取組みの説明を行った。また、大学が将来的に取り組むべきこと、高等教育機関の将来像、世界大学ランキングについての意見交換が行われ、参加した関係者間で活発な議論が展開された。

研究推進部では、今後もグローバル推進本部などと連携し、本イベントをはじめとする国際的な場において、ポスター展示やネットワーキングによるPR活動に関する取組みを継続的に行い、東海大学の研究活動について幅広く発信していく。



「東海大学産学連携フェア 2018」を開催

産官学連携センターは、8月8日に高輪キャンパスで「東海大学産学連携フェア2018」を開催した。本フェアは、東海大学の研究成果を社会に還元するきっかけや、学内外の研究開発に携わる人材の交

流の場となることを目的とした、産学連携推進イベントである。

基調講演では、大規模な産学連携をどのように進めていくかをテーマとして、文部科学省産業連携・地域支援課長の西條正明氏と、名古屋大学人間機械協奏技術コンソーシアムの領域統括の武田一哉教授に講演いただいた。西條氏は、現在の産官学連携施策を踏まえ、今後、企業の事業戦略に深く関わる大型共同研究の推進や大学発ベンチャーの支援・企業家の育成、起業前準備支援の充実の必要性を語った。また武田氏の講演は、名古屋大学で行われている産学連携事業やベンチャー創出・支援活動などを実際の事例に絡めて紹介し、社会が大学院生を独立した研究者の一人として認識しながら、才能や先端的な知識を企業や大学で共有することが重要だとするものであった。

ポスターセッションでは、約50件の研究成果を掲出し、来場者と研究者の間で研究内容の紹介や、連携研究の可能性なども見えた活発な意見交換がされた。来場者からは、学部の枠を超えた連携研究を評価いただくと共に、今後の研究にも注目したいとの感想をいただいた。

当日は台風13号の影響を受けつつも多くの方に来場いただき、盛況の内に幕となった。

プレスリリース

文理融合研究により、古代エジプトの「ファイアンス」の再現に成功

文化社会学部アジア学科の山花京子准教授らの研究グループは、古代エジプトの護符や儀礼などに使用されていた、石英を主成分とする「ファイアンス」と呼ばれる物質の再現を可能にする製法を開発した。ファイアンスは、古代エジプト、メソポタミア（西アジア）などで紀元前約4500年から紀元後2世紀頃まで、トルコ石やラピスラズリの代用品として装飾品や墓の副葬品に使われた。しかし、製作工程が複雑で難しいことから、その後登場したガラスに代わるようになり次第に廃れ、その製法は一切残されていない。

山花准教授は、長年ファイアンスの復元に携わってきた。これまでの研究で主成分は判明したものの、それら石英・アルカリ・炭酸カルシウムなどの材料だけでは立体造形物を作成することはできなかった。この問題について、本学工学部応用化学学科の秋山泰伸教授は、ピラミッドの石と石の接着剤としても使われていた水酸化カルシウムを主成分とする「漆喰」に着目し、これを石英などに少量含ませて焼くことで立体的な構造物の成形が可能になり、ファイアンスの復元が実現した。

今後は、古代エジプトの実際の陶器のサイズや質感により近づけ、博物館に「本物」と並べて、来館者が「触れることのできるレプリカ」としての展示を目指し、研究成果を社会に還元する活動を進めていく。なお、本研究成果は、「国際ガラス歴史協会」の学会（開催：9月3～7日、トルコ・イスタンブール）にて発表された。

今回開発した成分を使ってエジプトの出土品を模して製作した作品例



カバの置物



壺（香油、軟膏などの容器に使用）



皿



食器（黄色）



ひなぎく型（白色、中心部は赤）



上の皿のモデルとしたエジプトでの出土品（紀元前約1400年頃／ドイツ・新博物館所蔵）